

今回のパリ研修旅行の大きな目的の一つであるモン・サン・ミシェル修道院の見学にきた。フランス西海岸、サン・マロ湾上に浮かぶ小島に築造され世界遺産に登録されている建物である。

ヨーロッパの歴史ある建物を見る際には、その建物が建てられた時代背景及びその後の歴史を知らなければならぬであろう。このモン・サン・ミシェルも例に漏れず、数奇な時代を経て今に至っている。8世紀にアヴランシュ司教オーベルが夢の中で、大天使ミカエルが現れてこの地に礼拝堂を建てるようにとお告げ受けたことに始まっている。その後リチャード1世がベネディクト会の修道院を島に建て、これの増改築を重ね13世紀に、ほぼ現在のような形になった。18世紀にはフランス革命の際に修道院は廃止され、刑務所として使用されていた。その後19世紀の中頃に修道院として復活したのである。

遠くはなれた本土から小さな山のように見えていた修道院が、島に渡る専用道路に入ってくると、干潟の中に浮かび上がる尖塔を掲げた修道院は、なんとも言えない神秘的なシルエットを持ち、洋上のピラミットのように見えた。

潮の干満が非常に大きな地域の為、大潮の時期には、参道の入り口まで潮が上がってきて島の状態になるそうである。時代とともに色々な様式で複雑に増改築されており、これも長期にわたる増改築が行われるヨーロッパの歴史ある建築の特徴の一つであろう。

一歩中に入ると、古い昔修道院を訪れた巡礼者のための宿屋や酒場が現在観光地としてのホテルや土産物屋になっており、時の流れを止めたかのような独特の町並みが続く。町並みを抜け修道院の上部まで一気に上るとさすがに息が切れるほどであった。海に臨んだ大修道院入り口から外に出ると、眼下に潮が引いた一面の干潟を見下ろすことができる。

その後礼拝堂を抜け回廊付の中庭に出る。この時代に屋上庭園を造っていたとは、驚きである。現在でも屋上庭園を設計する場合には、よく注意を払って色々な問題が発生するのに、すごい技術料である。排水方法などが単純になっており面白い。また下階への負担を軽くする為に、上階の屋根を木造してあったり、当たり前であるが良く考えられている。歴史的、建っている場所、建物の様式・形体どれを取っても、見るに価する建物であった。

又観光のために造った道を、建物環境を復元する(急速な陸地化の修復)為に壊し、新しく橋になるようにするそうである。歴史的建造物を守って行くことは、大変な努力が必要で有ることを考えさせられた。

今度は潮が満ちているときに洋上に浮かぶ修道院のシルエットをぜひ見たいものである。

